

地域を巡る 「川の営み」をとおして

千葉 茂樹・渡辺 仁



市野川のモニタリング測量・調査（滑川町）



市野川蛇行河川の微地形測量（渡辺，滑川町にて）



魚類調査&ミニ水族館（千葉，滑川町の河畔林にて）

はじめに

1997年、河川法が改正され、明治以来の根幹であった「治水」「利水」の河川管理の目的に、新たに「河川環境の整備と保全」が加えられました。これにより「治水」「利水」と同等に「環境」を事業目的に加えてもよい時代になったわけです。

そういう背景のもと、地域社会の共有財産（Social Common）としての川を市民の手に取り戻し、仲間たちと取り組んできた時間を紹介します。

比企の川づくり協議会の活動

埼玉県比企地方には、一級河川の荒川をはじめ多数の中小河川が存在しています。都幾川・槻川・市野川などが、動脈のように巡っており、外秩父山系から東流・南流して荒川に注いでいます。特に、日本最初の国営公園である武蔵丘陵森林公園（滑川町）の南を流れる市野川は蛇行部分が多く、周辺には農業用ため池や谷津田が数多く点在しています。これらの地域では水害が時々発生していたため、埼玉県は1996年、河川の直線化を前提としつつ蛇行河川を保全する整備計画を策定し、工事が始まりました。この計画は、環境保全への高まりに対応するために、整備区間を4区間に分け、蛇行部分に「親水ゾーン」「バッファゾーン」「自然保護ゾーン」



なごや環境大学・近自然工法研究会（名古屋市）からの視察・研究交流会（滑川町にて）

と環境配慮型の計画でした。

しかし、下流から始まった工事は、私たち市民の目からは自然環境への影響が大きく、納得できるものではありませんでした。そこで私たちは「多自然川づくり^{*}」の専門家に相談しつつ、整備計画の見直しを県に提案し、2006年、整備計画を見直すこととなりました。

計画を見直すための市野川協議会を発足。河川管理者である埼玉県を始め、地元4団体（農業、環境、街づくり、川づくり）、専門家、町役場による検討が始まりました。

その時に大きな力となった市民団体が、2001年地元有志によって立ち上げられた河川環境団体の「比企の川づくり協議会」でした。設立趣旨は、流域の住民、河川管理者、流域市町村などとのパートナーシップを構築し、相互の活動状況や現地の実情の正しい理解を通じて、比企流域の自然と文化に根ざした川づくり運動を展開することであった（事務局長に、千葉茂樹就任）。



ライフジャケット姿で活動の発表（右2人目：千葉，3人目：渡辺） 賞状写真

全国大会「いい川・いい川づくりワークショップ」で準グランプリ

市野川の計画見直しは、専門家からは検討の道筋を示していただき、比企の川づくり協議会は地元の団体や町にも呼びかけ、魚類調査、カヌー調査などを行い、河川環境情報図を作成、県は地形測量や模型作成、数値シミュレーションなど、皆が一丸となって取り組みました。1年間で7回ほど協議を重ね、当初の治水機能を確保しつつ、蛇行河川と河畔林への影響をより小さくした新しい計画ができあがりました。

多自然川づくり専門家らのアドバイスをいただいたことで、蛇行河川に洪水を負擔させつつバイパス河川を整備するといった全国的にも珍しい2Way方式を採用。川の営力による変化に対応するためモニタリング調査を継続しながら、整備を進めることになりました。

2008年、全国の川づくりのワークショップ

^{*}「多自然川づくり」とは、国が示しているわが国の全ての河川整備の基本指針であり、川の自然の営み、地域の暮らしや文化、河川環境や景観と治水の統合した整備手法。国土交通省内に「多自然川づくり研究会」が設置されており、市野川協議会は本研究会の専門家の応援をいただいた。

でこれらの取り組みを発表したところ「皆の知恵が生かされている」「専門家、NPO、行政の役割分担がうまくいっている」「モニタリングなど科学的アプローチが、市民科学的である」「市民統治力がすごい。一つのモデル、市野川モデル」など高い評価を得て、「準グランプリ」を受賞いたしました。

楽しみながらみんなで進めた モニタリング測量や川あそびなど

モニタリング調査は、整備を進めるための測量・調査であったため、保全したい蛇行河川の微地形（川の淵・トロ、瀬・砂州）や滲筋の測量、河床材料、水生生物・河畔林調査の方法について、河川環境の専門家から直接指導を受けながら実施しました。

常時市民5人体制で実施しましたが、平均年齢は約63歳でした。夏の熱中症を避けるため、無理はせず、午前中の半日みの作業にすることで、楽しみながら進めることができました。

（財）河川環境管理財団の助成を得てゴムボート・測量機器を購入し、初年度のモニタリング調査を終了しました。1年目の調査が終わった時点で、メンバー皆で専門家が所属する岐阜県各務原市にある（独）自然共生研究センターに1泊で出向き、直接指導をいただくとともに、実験河川でさまざまな河川のメカニズムについて見識を広めることができました。台風が来るたび



稚アユの背びれカット方法の打合せ（入間川）



「槻川で川あそび」カヌー&カヤック（小川町）



荒川流域再生プロジェクト「標識アユ放流現場（入間川）」



槻川の水辺再生100プラン協議（小川町役場）

に洪水痕跡・水位観測，写真撮影などを行いつつ，モニタリング調査を継続しました。

2009年，測量機材持参で前年同様に“いい川”づくりワークショップで発表したところ，市民レベルでの河川環境の測量が高く評価を受けて，「技術賞」を受賞しました。

また，地元の子どもたちに市野川に親しんでもらうため，毎年，夏季には住民とその子どもたちに「川あそび」を呼びかけ，魚とりとミニ水族館展示，カヤックやゴムボートでの川あそびイベントも開催しています。

「新しい公共」に向けて—— NPO法人比企自然学校の設立

これまで，ボランティア型で活動を行ってききましたが，最大の課題は，活動の次世代へのバトンタッチです。そのためにどうすればよいか！ その一つの答えが「ボランティア型から事業型への転換」でした。これらの活動を生業とするため，谷津田・ため池・河川などの自然，地域の祭り・郷土料理などの伝統文化，耕作放棄地・空き家などの未利用資源に着目し，環境教育，都市農村交流，農工商連携などの手法を取り入れ，これらの農村部の資源と都市のニー

ズを結びつけるといったものです。

昨年，比企の川づくり協議会の仲間に呼びかけ，これらを実践する母体としてNPO法人比企自然学校を設立しました。地域雇用創出，地域の自然や文化の継承，農地保全，地場産業の発展，生物多様性の維持，地域活性化など，社会貢献の一翼を担うことを目指します。正にこれから「新しい公共」としてのNPOの真価が問われようとしていることに関し，筆者らは次のような感想を抱きながら，また新たな時間を過ごそうとしています。

千葉（代表）：昨年9月，NPO法人を立ち上げるため，何を血迷ったのか30年間勤務した会社をやめてしまいました。質素な自給的生活，地に足のついた暮らしは，心が豊かになることを実感しています。

渡辺（事務局長）：都市住民が「半農（漁）半×」といった形で，里山・里川の生業と両立させられる事業の創出を期待したい（特に，予想される首都圏直下型巨大地震の避難候補地を念頭に入れつつ……）。